

Title	脳科学から宗教を解明する：その展望と批判的検討(2月18日 信濃町キャンパス予防医学校舎セミナー室7)
Sub Title	Intersection of brain and religion: understanding religiously elevated emotions via fMRI and general theoretical models of mind and emotions
Author	佐藤, 有理(Sato, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.16, (2011. 7) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000016-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

脳科学から宗教を解明する：その展望と批判的検討

Intersection of Brain and Religion: Understanding Religiously Elevated Emotions via fMRI and General Theoretical Models of Mind and Emotions

(2月18日 信濃町キャンパス予防医学校舎セミナー室7)

2011年2月18日に、オランダ・ニーメゲン Radboud 大学 Foundations of Mathematics and Computer Science 講座長 Henk Barendregt 教授と、カナダ・トロント大学心理学部 Gerald C. Cupchik 教授をお招きし、講演していただいた。Barendregt 教授は、ラムダ計算とタイプ理論に関する情報科学の世界的な権威として知られている。今回の講演では、近年 Radboud 大学メディカルセンターと共同で行っている Mind-Brain and Mindfulness Meditation Research Team での心の統合的な認知神経モデルの研究について、ご自身がインストラクターも務めておられる仏教瞑想の話題にも触れながら論じられた。また、感情の心理学研究を含む広範な分野で活躍する Cupchik 教授は、ご自身が長年取り組んでおられる感情の一般理論の心理学研究から、宗教的経験や美的経験について論じられた。

両講演の前には、渡辺茂教授と宮坂啓造教授から本セミナーの開催趣旨について、また、心理学、認知神経科学、文化人類学などの観点からの宗教的経験の研究について導入的なお話があった。本セミナーは、本グローバル COE の拠点場所である三田キャンパスが入試期間中で使用できなかったため、急遽、信濃町の医

学部キャンパスでの開催となったが、心配をよそに当日は多くの方々の参加があった。また講演後には発表者とフロアとの間での活発な議論が、司会の岡田光弘教授が窮するほど予定時間を超えるまで交わされていた。

(佐藤有理)

On February 18 2011, Professor Henk Barendregt and Professor Gerald C. Cupchik gave lectures on the themes related to brain and religion. We had fruitful discussions from psychological, anthropological, and philosophical viewpoints.



西洋古典哲学シンポジウム

古代ギリシア・ローマの哲学とレトリック

Philosophy and Rhetoric in Ancient Greece and Rome

(2月23・24日 三田キャンパス東館4階セミナー室)

韓国と日本ではソウル大学と慶應大学を中心に、西洋古代哲学・古典学の分野で2006年から学术交流を続けており、ソウルと東京とで毎年交互に研究会を開いてきた。今回は人文 GCOE 主催で、2011年2月23・24日に「古代ギリシア・ローマの哲学とレトリック」というテーマでシンポジウムを開催した。韓国からはカトリック大学の Lee Chang-uh 教授、ソウル大学の Ahn Jaewon 研究員と、同大学大学院生 Lee Se Woon 氏に参加いただき、古代哲学の中でも近年研究が進んでいるヘレニズム哲学と古代レトリックに焦点を当て、活発な報告と議論を行った。

まず、Lee Chang-uh 教授がストア派によるプラトン『ティマイオス』解釈を議論し、続いて、秋田大学の近藤智彦講師が古代懐疑派カルネアデスの議論を検討した。日韓を代表する（数少ない）ヘレニズム哲学の専門家による最新研究に、新たな問題関心の拡がりを共有できた。古代レトリックのテーマでは、Ahn Jaewon 研究員がキケロ初期法廷弁論に見られる「フマニタス」理念を検討し、堀尾耕一氏によるニーチェによる古代修辞学研究の分析、そして Lee Se Woon 氏によるキケロ『トピカ』の「トポス」概念の検討という三つの本格的な発表がなされた。日本ではレトリックの歴史について研究がたち後れており、今後韓国との協力、とりわけ Ahn 氏ら若手との学术交流が重要となる。レトリックのセッションでは東京大学の高田康成教授にも参加いただき、当分野の研究発展に期待が寄せられた。

また本シンポジウムは、アジアでの西洋古代哲学研究を意識した企画を行い、慶應の大学院文学研究科でアウグスティヌスを主題に修士論文を書いた李博君と、エストニアから慶應に留学して日本語とギリシア哲学を学んでいるマルト・ポデル君によるプラトン哲学研究を共に英語で報告してもらい、国際色豊かな催しとなった。2010年夏の国際プラトン学会の第9回大会を慶應三田キャンパスで開催したことに代表されるように、アジア圏での西洋古代哲学研究は近年目覚ましい成果を挙げており、「論理と感性」研究を含む哲学分野の活性化に寄与している。日韓の若手研究者を中心に、今後もより豊かな研究交流が促進されることを期待したい。

(納富信留)

The International Symposium “Philosophy and Rhetoric in Ancient Greece and Rome” was held on 23–24 February, 2011, with 3 guest-speakers from Korea, on the themes: “Hellenistic Philosophy” and “Ancient Rhetoric”.

